



## 第61回 ともだちを強調する社会は健康なのか?

### ▼ともだちはいりますか?

「やっぱり友だちはいらない。」(押井守)という本を読んだ。押井守は「攻殻機動隊」で有名なアニメーション監督である。私はどちらかというと内向的な性格なので、なかなか他人と打ち解けられない。若い頃は、「ともだちを大事にしなさい」といわれ、努力したこともあるが、いつの頃からかバカバカしくなってやめてしまった。別に、相手が嫌いなわけではないけれど、話をしても話題が合わない、興味がわからない、つまらない。それでも仲良くしろというのは一種の拷問である。押井守は、「ともだちはいらない、仕事仲間はいる、家族もいる、それだけで十分だ」という。この言葉に私は深く納得した。

### ▼ともだちを強制するうさんくささ

こう書くと、「何様のつもりだ」「上から目線で気にくわない」と思われるかもしれない。人間はひとりひとり別の存在だから、価値観や考え方が違っていても当然である。不思議なことに、人間というのは「自分の考えていることが一番正しい」と思いがちである。でも相手と自分は「ちがって当たり前」、だからこそ対話することに意義がある。価値観がちがっても、対等に議論して意見を出し合い、気づいたら自分も少し変化している、そういう関係はとても潔くて気分がいい。その人はともだちではないが、対話のできる相手だと確信できたとき、とてもうれしくなる。本当に話すべきことを話せない関係でありながら「ともだち」であるべしという社会は、空気のよどんだ気味の悪い世界である。

### ▼仕事仲間はともだちとはちがう

実際の社会では、職業の立場や権威関係が伴っているので、何でも率直に対話できるかというと、なかなかそうはいかない。場の空気を読むのも、ほどほどに必要だと思う。ただ、他の職種の人と話をしていて、「医師の自分には見えないこと」が現れることがある。そういうとき、私はその人を尊敬する。それは一種のプロ

フェッショナルな目線から生まれる見方である。その人はともだちではない、ともに仕事をする大事な仲間である。ともだちを大事にしないと強調する社会は、じつは、「ともだち」をないがしろにしている社会なんじゃないだろうか。エーリッヒ・フロムは70年前に「自由からの逃走」のなかで、資本主義社会では人生のすべてが資本の増大や商品消費にふりまわされるようになり、その巨大な経済装置に個人では対決できないが故に、人間は強い無力感にうちのめされると書いた。一見豊かに見えるが、ひとりひとりは孤立して不安で、つねに競争せざるを得ない社会。そういう社会の中で、私たちは、自分の人生にとっての仕事や家族、そして「ともだち」とはなにかを、しっかりと自覚的に考える必要があるのでないだろうか。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)